

成人の日



1月の第2月曜日は成人の日です。満20歳になった男女の成人を祝い、前途を励ます日です。1948年以来、成人の日は1月15日と決められていましたが、連休にするため2000年に現在の日取りに改められました。

日本では昔から男の子が大人の仲間入りをする通過儀礼が行われていました。682年(天武11年)には既に儀式として制定されており、奈良時代以降は「元服」と呼ばれるようになりました。「元」は「はじめ」、「服」は「着物」の意味があり、「元服」とは「子供が成長して初めて着物を着る」という意味があります。宮廷や貴族の社会では、およそ13歳から15歳くらいになると元服して少年の髪型を成人の髪型に変え、冠を被るようになり、着物も成人の服に変わりました。これが今の成人式の起源です。

平安時代には元服の際には、童名(どうみょう)に代わり大人の名前を与えられ、公家は冠、武家は烏帽子を被ります。これが大人の男性になるという証でした。

江戸時代になると、「元服式」で男性は正式に前髪を剃り落しました。これを「月代(さかやき)」といいます。成人の年齢は男性は決まっていませんでした。

元服のときは父親や烏帽子親と呼ばれる立ち会いの仮親に烏帽子を被せてもらい、彼らの名前から1字をとって改名しました。烏帽子親は長老や有力者などに頼むのが習わしでした。烏帽子親は新成人の将来の生活に対していろいろと面倒を見ます。

江戸時代になると、烏帽子を被る習慣は廃れていきましたが、貴族や武士に倣って庶民の間でも、18、19歳で元服を行うようになりました。

一方、女性の場合は平安時代中期には13から16歳ごろになると、垂らしていた前髪を結び上げる「髪上(くしあげ)」が行われました。また、裳(も—正装のときに着ける衣)を着てお歯黒をし、眉墨を書くなどするようになりました。

鎌倉時代以降は成人女性と認められると、袖留(そでとめ)」として女兒の服から小袖をふさぐ大人の着物を着るようになりました。

江戸時代には女性が成人に伴って行う儀式を「成女式」と呼び、改名もしました。裳を着たり、お歯黒や眉墨をするのは結婚後になるなど、時代によって女性の成人年齢は若干変化していきました。

いずれにしても、昔は日本では男性は15歳、女性は13歳くらいから大人扱いられていたのです。

現在の成人の日は1946年に埼玉県で行われた「成年式」に由来します。戦後の混乱期に次世代の担う青年たちが、日本を立て直そうと奮起し、一致団結して企画した儀式でした。その2年後に「成人の日」が正式に制定されたのです。

成人の日を送るお勧めの花

バラ

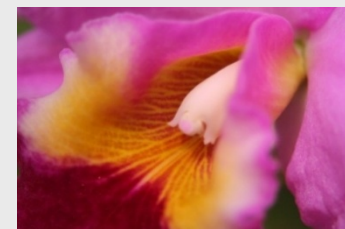
成人式のお祝いには、高級感溢れる大人の花をいかがでしょうか。ベルベット調の質感を持つ品種なら、季節感もあいまって最適でしょう。

スイートピー

バラやヒヤシンス、シトラスを思わせるフレッシュな香りを持ち合わせたスイートピーは、色どりも豊かで、新成人を祝うにふさわしいアイテムです。

カトレア

花言葉は「成熟した魅力」。その言葉の通り、成人式という通過儀礼には、おとなの魅力を備えたカトレアがお勧めです。色もピンクだけでなく、白やグリーンも流通しており、芳香を持つものも多くあります。



オリエンタルユリ

とりわけ「ニンフ」は明るい色目のバイカラーの取り合わせで、且つ豊かな芳香を放ち、大人としての第1歩を踏み出した新成人の方たちを祝うにふさわしいユリです。

シンビジウム

豪華でエレガントは花姿をしつつも、花言葉は「飾らない心」。成人しても変わらず素直な心を持ってほしいと願う気持ちとともに贈ってみてはいかがでしょうか。

ボタン

「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿はユリの花」などと女性の可憐さを象徴しつつ、一方では「百花の王」と呼ばれたり、花ことばは「王者の風格」であったり男気の象徴ともされます。この時期は冬牡丹や寒牡丹がお勧め。新成人を迎える男女に。